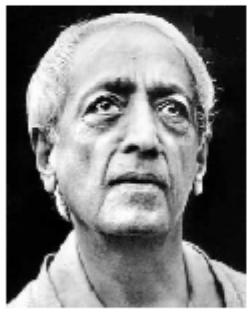


Jiddu Krishnamurti ジッドウ・クリシュナムルティ

Jiddu Krishnamurti May 12, 1895
 Time: 12:23AM Zone: 5:30 DST: 0
 Mandanapalle, India
 Longitude: 78E30 Latitude: 13N33 CurPer: Me/Ra/Ke
 Lahiri Ayanamsa: 22:24 365.25 Day Year

As 22:05 Cp	Vimshottari Dashas
Su 28:25 Ar	Ke May-12-1895
Mo 02:45 Sg	Ve Dec-01-1900
Ma 19:25 Ge	Su Dec-01-1920
Me 06:29 Ta	Mo Dec-02-1926
Ju 12:48 Ge	Ma Dec-01-1936
Ve 06:03 Ge	Ra Dec-02-1943
SaR 10:16 Li	Ju Dec-01-1961
Ra 27:28 Aq	Sa Dec-01-1977
Ke 27:28 Le	Me Dec-01-1996

	Su 28:25	Me 6:29	Ve 6:03 Ju 12:48 Ma 19:25
Ra 27:28			
As 22:05			Ke 27:28
Mo 2:45		SaR 10:16	

Ma	Mo		Ra
Me			As
Ju SaR			
Su Ke	Ve		

ジッドウ・クリシュナムルティ (Jiddu Krishnamurti 1895 年 5 月 11 日 - 1986 年 2 月 17 日) は、インド生まれの宗教的哲人、教育者。
 一般的な分類としては宗教家になるが、自ら宗教団体を解散し宗教批判を行った。思考の終焉や条件付けからの解放などを説いた彼の教えは、その現代的なアプローチから宗教界を超えた幅広い支持者を獲得した。20 世紀最高の覚者の 1 人であるとする声が多く、タイム誌によりマザー・テレサと共に現代の 5 大聖者に数えられた。
 ウィキペディアより引用抜粋

クリシュナムルティは 14 歳の時にエーテル視力のあるリードビーターに見出され、神智学協会のアニー・ベサントによって養子に引き取られたのである。それは来るべき世界大師の器として準備させるためであった。彼のオーラは全く利己性のない純粋なものであったため、リードビータの目にとまったのである。
 それはクリシュナムルティにとっては突然の環境の変化を表し、突然、一つの王国のリーダーに祭り上げられたようなものである。後々王となることが約束されている王子のような扱いを受けて、英才教育を施されたのである。
 このことは、チャートの中で 8 室支配の太陽が 4 室で高揚していることで表されている。
 8 室はパートナーの資産を表し、4 室は城やアシュラムを表している。神智学協会やその会員たちで形成する王国の皇太子となったようなイメージである。
 そして、神智学協会の中に「星の教団」("The Order of the Star") が設立され、クリシュナムルティがその団長に任命され、実際に彼は神智学協会の中で権威を持つ役職を与えられるのである。



中段左：クリシュナムルティ
 中央：アニー・ベサント
 中段右：C.W.リードビー
 ター
 下：ニティヤ(弟)

8室は遺産、相続のハウスであるが突然、養子縁組によって、神智学協会の次世代のリーダーのポストを与えられたのである。彼はそうした地位やポストを望んでおらず、好ましくも思っていなかったのであるが、太陽は8室の支配星のため、彼の思い通りにはならず一国一城の主の地位に就かされてしまったのである。そこには養子縁組による絆というものがあり、彼に期待された役割を断ることができないのである。8室は利得を得ても自由なハウスではないのである。そして大抵、苦悩が伴うのである。

神智学協会の中で、英才教育を施された彼は金星/土星期や金星/水星期にオックスフォード大学を受験しているが、不合格となっている。来るべき世界教師の器となるために教養や学歴を身に付けようとしても全くそれらを勝ち取ることができないのである。金星は5、10室支配で機能的吉星であるが6室に在住しており、ウパチャヤの吉星である。ウパチャヤ凶星の場合、他者との競争に競り勝って試験に合格するだけの闘争心や集中力を与えるが、ウパチャヤ吉星は、他者との闘争を競り勝つことができないのではないかとこの事例を見て思われるのである。

クリシュナムルティは、金星期の半ばから終わりにかけて、主に英国やフランスなどの海外で過ごしており、金星/水星期などにはオックスフォード大学の受験勉強などもして、教養を高めたり、学習に励む生活を送っていたのが分かる。金星は5室の支配星で、水星は9室の支配星で5室に在住している。大学などで教授と接触したり、高度な学問を学んだりする幸福な時期を示唆している。

しかし、金星期を通して考えたときに金星は6室で吉意を損っており、大学受験にも失敗しているため、苦勞が感じられる。これは周囲の期待は大きく、クリシュナムルティに対して、恵まれた環境が提供されるにも関わらず、彼は闘争心や欲がない為、それらの期待に応えられないという状況を表しているのかもしれない。本来、大学受験などは彼の仕事でもなく、使命でもないのだがそれを強いられている苦しさも解釈することも出来る。また神智学協会内で彼に敵対する勢力がいたりなど、必ずしも彼を取り巻く環境は、平穩だったわけではないようである。

マハダチャー太陽期に入ると、弟のニトヤナンダの病気の療養のために、一緒にアメリカのカリフォル

Jiddu Krishnamurti ジッドウ・クリシュナムルティ
ニア州にあるオーハイバレーに居を移すのである。3室を弟のラグナとすると、太陽は健康を表す6室の支配星で寿命を損失するマラカの2室に在住している。

彼はマハダシャー太陽期に入った頃から、毎朝30分と就寝前の10分間に規則的な瞑想をするようになり、さらにオーハイバレーに移った頃からは自己流の瞑想を実践するようになるのである。その頃の体験は資料から抜き出すと以下のように綴られている。

ところで私は8月3日から毎朝30分、定期的に瞑想しています。自分で驚いているのですが、私は割合簡単に精神を集中することができました。そして数日もしないうちに、私はどの点で失敗したのか、またどの点で誤ちを犯しているのかがはっきり分かり始めました。直に私は過去に積み重ねてきた邪悪な蓄積物を意識的に一掃し始めました。

この頃からクリシュナムルティは続けざまに不可思議な体験をするようになります。それは彼の一心不乱な「探求」から生じた一時的な幻想なのか、あるいは宗教的な体験の一部であるのか判然としません。そして、そのような体験の直前には必ず熱に浮かされて半意識状態になるほどの肉体的な激痛を伴っています。このような苦痛のあとに、彼は仏陀の存在を感じたり、その姿を見たりしています。

私は自分自身から離れてしまいました。私はあらゆるものの中にいるのです。というよりもあらゆるものが私の中にあるのです。無生物も生物も、山や虫や呼吸しているすべてのものが私の中にあるのです・・・

私は光明を見ました・・・「真理」の泉が私に開示され、暗黒は消散しました。

太陽は8室の支配星であり、8室はモクシャハウスであり、瞑想などの解脱のための実践を表しており、また神秘体験やビジョンなど、この時期の超常的な体験も表している。4室は心のハウスであり、プライベートなハウスであることから、マハダシャー太陽期は彼が自分の心の内面に意識が向かうことを表している。太陽は魂の表示体であり、もともとの彼の高い精神的ステージにより、容易に内面に集中することができ、瞑想から深い果実を得ることが出来ることが分かるのである。

そして、太陽期が終わって、月期に入った1927年6月30日に彼は神智学協会の総会で以下のような演説をして、彼が真理（悟り）に到達したことを示唆し、全く彼の心境や意識が一変したことが分かる。

「真理はまるで夜盗のように、ほとんど予告もしていないときにやってくるものです・・・いかなる人間もあなたに自由を与えることはできません。あなたはあなた自身の中に自由を発見しなければならないのです。しかし私はそれを見出したので、その道を皆さんに示したいのです・・・その焰の中に入り、焰と一体となることは誰にでもできることなのです・・・そのときあなたは自由です。たいていの人たちは個人というもの、つまり「私」という意識にしがみついています。これこそ業を生みだすものなのです。」

そして続く1927年8月2日に神智学協会の総会で以下の演説をし、さらに彼が到達した真理を強固に示して、ついにその悟りから来る結論として彼は自らが団長に就いていた「星の教団」("The Order of the Star") を解散するのである。

「私が今まで熱望してきたものを私は発見したのです。私は一つになりました。従ってこれからは分離することは決してないでしょう。なぜなら私の思考や欲望や渴望　それらは皆個人の自我から生まれたものです　はことごとく滅ぼされてしまったからなのです・・・」

しかしながら、「真理」はあなたの中にあります。あなた自身の心や、あなた自身の経験の中で「真理」を発見できるのです。そしてそれこそ唯一の価値のあるものです。」

彼はどんな権威も組織化された教義も人間を自由にしないということを見出し、結論として、「星の教団」("The Order of the Star") や神智学協会自体が人々を束縛し、人々が自分自身で探求する妨げとなる檻であることを悟るのである。そしてその悟りの必然的な結果として、「星の教団」を解散するのである。クリシュナムルティは翌々の1929年8月3日に団員に向かって解散の理由について説明している。

「「真理」は道のない陸地であると私は申しあげます。どのような通路によっても、またいかなる宗教や宗派によっても「真理」に近づくことはできません。それが私の考えです。私はそれを絶対に、そして無条件に信じます。「真理」は無限であり、無条件のものであり、またいかなる道によっても接近することができないため、それを組織化したり、強制したりするような組織を作るべきではありません・・・もしこのような目的で組織が生みだされるならば、それは障害になり、弱点になり、束縛になってしまうのです。それは必ず人間を損ない、成長を妨げ、その人間固有の独自性の確立を妨害することになるのです。その独自性というものは、あの絶対に無条件の「真理」をその人間が独力で見出すことの中にあるのです・・・

ある特定の人だけがその幸福の王国に入る鍵を持っていると考えられています。しかし誰もその鍵を持っていないのです。その鍵を持つことができる権威のある人は一人もいません。その鍵はあなた自身の自己なのです・・・私の唯一の関心は人々を絶対に無条件に自由にすることです。」

そして1930年になるとクリシュナムルティは神智学協会をも脱退していくのである。

我々が精神世界で触れることの出来る彼の著書のほとんどは、この神智学協会を脱退した後に書かれたものである。

『自我の終焉』 根本宏・山口圭三郎訳 篠崎書林

『生と覚醒のコメンタリー - クリシュナムルティの手帖より 1-4 』 大野純一訳 春秋社

『自由とは何か』 大野純一訳 春秋社 etc.

彼は神智学協会を脱退して一人で活動するようになってから、物理学者のデビッド・ボームや、小説家のオルガス・ハクスレー、その他大勢の芸術家、宗教家、教育家、政治家(革命家)など、様々な分野で活躍する人々が彼の元を訪れたのである。その場合、彼との対面というものは、あたかもカウンセリングや精神療法のセッションのような一対一の面談であり、中にはクリシュナムルティに挑戦してくるような人々もいたようである。その中で、クリシュナムルティは来談者の思考や欲望の過程を追って、逆に問いかけを用いながら、来談者が真理を発見するのを手助けするのである。

月は7室の支配星で12室に在住し、月の両側に惑星が在住しないので、ケーマドルマヨーガを形成している。本来、一人で孤独に過ごすのを好む配置である。然し、彼の月から見て7室目には金星、木星、火星が在住しており、これらの惑星は彼の元を訪れた各界の著名人を表している。例えば、金星は歌手や俳優など芸術家で、木星はヨギや宗教家、火星は政治家、革命家などである。彼の元には真理を求める実に様々な分野の人々が集まってきたのである。

Jiddu Krishnamurti ジッドウ・クリシュナムルティ

従ってマハダチャー月期に入って、今まで自分を縛ってきた神智学協会を脱退し、自らも協会で権威によって人を縛る立場を捨てたのである。そのような霊性を追求しながらも実は俗的であるような環境を捨て、また自分が長年、居場所にしてきた神智学協会という家（城）を捨てて、彼は隠遁生活に入ったのである。それは12室の月が表している。しかし、月は7室の支配星で、月から見ると7室に惑星集中しているため、彼はケーマドルマヨーガの月期に隠遁したにも関わらず、返って月期には対面セッション的な多くの人々との出会いを経験したのである。

これは逆に言えば、ケーマドルマヨーガが月からケンドラに惑星が在住している時にその凶意が緩和されるといふことの見事な実例である。

そして、「星の教団」("The Order of the Star")の解散を宣言したのが1927年8月2日であり、その時、トランジットの土星は10室を通過して11室に移行し逆行することで10室に影響を投げかけた時期である。木星は魚座で逆行して、同様に11室と10室にアスペクトしていた。10室と11室にダブルトランジットが形成されていた時期である。つまり、ちょうどこの頃、彼の10室の辺りを土星が通過していた時期であり、彼の出生の土星が形成する象意が活性化し、顕現する時期にいたのである。

彼は山羊座ラグナでラグナロードの土星が10室で高揚して、パンチャマハーブルシャ・シャシャヨーガを形成し、1-10室の絡みが生じて強力である。この配置はチャートの持ち主の地位、名声、影響力などを表しているのである。シャシャヨーガはダチャーに関係なく、チャートの持ち主の生涯に永続して効果を及ぼすと言われているが、この土星がトランジットする時期というのは特にそれが顕著に重要である。土星のトランジットは在住するハウスや星座の象意における責任を表しているのであるが、彼の場合、それは人々に真の意味での自由を与えることであり、そのために「星の教団」を解散することであった。真理を与えると称する組織から解放し、真の自由を得させるという使命を遂行する責任が彼にのしかかっていた時期であったといえる。そして、彼は未だかつて、影響力を振るうことの出来る組織を解散するなど、誰もやったことのないような偉大なことを成し遂げたのである。人々に真の自由を与えるための英雄的な行為である。

天秤座とは人に縛られることを嫌い、また人を縛ることも嫌うのである。自由人であり、自由を愛好するのが天秤座である。土星は大衆を表し、土星が強い人は大衆から民主主義的に選ばれた真の代表者、リーダーを表している。これは彼が「星の教団」の解散などの行為によって、真に大衆から認められて偉大な指導者になったことを表しているのである。神智学協会で次世代の世界教師の器としての立場に立たされて、「星の教団」の団長になった時の彼は真の民主主義によって選ばれた大衆の指導者ではなかったのである。単に相続や贈与のようなかたちでアニー・ベサント夫人やリードピーターらの引き立てによって、そうした地位、立場を与えられたに過ぎない。

しかし、「星の教団」の解散を行なった彼はその行為によって、大衆（団員）に真の自由を与え、そのことによって、その後、大衆（探究者）の評価によって、彼は大衆の真の指導者となったのである。未だかつて権力や利権を意味する自分の組織を解散するような教祖はいないのであって、それを成したのは彼の10室で高揚する土星の力によるものである。



(舞台上で聴衆の前で講話をするクリシュナムルティ：10室土星シャシャヨーガを象徴している)

その土星には木星が一方的にアスペクトしており、理想を現実のものとするの出来る強い配置が形成されており、彼の社会奉仕の影響力の大きさを物語っている。

As	22:05	Cp
Su	28:25	Ar
Mo	02:45	Sg
Ma	19:25	Ge
Me	06:29	Ta
Ju	12:48	Ge
Ve	06:03	Ge
SaR	10:16	Li
Ra	27:28	Aq
Ke	07:30	Is

西暦	月日	出来事	Dasha	Transit
1895年	5月11日	インド南東部のマドラス州の近くマダナパルという町で、カースト制度の最高位の階級であるバラモン家に生まれる。幼・少年時代のクリシュナムルティはおっとりとしたおとなしい子供で、大人の目には鈍重という印象を与えていたようです。木や植物を長時間じっと見つめているような瞑想的な傾向があり、学校の勉強にはほとんど興味を示さず、毎日のように先生から鞭で叩かれていたということです。	ケートゥ/金星	木星: 牡羊座 土星: 天秤座
家系は名門に属し、曾祖父は有名な東インド会社の役職を務め、同時にサンスクリット学者としても名を知られていました。父親もマドラス大学を出て、インドの英国政府直轄の財務局に勤務し、後にはその土地の行政長官にもなっています。				
1909年	11月	アニー・ベサントが初めてクリシュナムルティに会う (クリシュナムルティ14歳)	金星/ラーフ	木星: 乙女座 土星: 魚座
1910年	3月	アニー・ベサントが父親の承諾を得て、以後の教育とその他の一切の面倒を見るために、クリシュナムルティを正式に養子として引き取る。	金星/ラーフ	木星: 乙女座 土星: 魚座 牡羊座
1910年	3月22日	ベサントと弟のニトヤンダと共にインドを発つ	金星/ラーフ	木星: 乙女座 土星: 牡羊座
1910年	5月5日	イギリスに到着(4ヵ月後帰国)	金星/ラーフ	木星: 乙女座 土星: 牡羊座
1912年	2月	イギリスに渡って彼の教育が開始される。その後、10年間ヨーロッパで生活する。	金星/木星	木星: 蠍座 土星: 牡羊座
教育といっても、とくに神智学協会の教義や特殊な訓練によって教育をするわけではなく、将来「世界の教師」になった				

Jiddu Krishnamurti ジッドウ・クリシュナムルティ

とぎのための、いわば「紳士教育」なのです。インドではほとんど正常な教育を受けていなかったため、各学科の専門の先生が個人指導に当り、なかでも英語は神智学協会附属の大学の英語の先生について真剣に勉強しています。この時期に詩人のシェリーやキーツの詩が好きになり、自分で詩作もしています。このように学校教育ではなく、個人指導による教育であったため、交友関係もほとんど神智学協会の会員やその家族にかぎられていました。またちょうどその頃に神智学協会の中に「星の教団」("The Order of the Star") が設立され、クリシュナムルティがその団長に任命されています。

1915年 1916年		オックスフォード大学の第一次試験のための準備が進められる。	金星/土星	木星：魚座 牡羊座 土星：双子座 蟹座
1917年		オックスフォード大学に受験して不合格	金星/水星	木星：牡牛座 土星：牡牛座
1918年		オックスフォード大学に再受験して不合格	金星/水星	木星：双子座 土星：蟹座
1918年 秋		大学入学検定試験を受験し不合格	金星/水星	木星：双子座 土星：獅子座
1920年		語学を磨くためにフランスに向かう（真理の探究を再開）	金星/ケートゥ	木星：蟹座 土星：獅子座
1920 - 1921 年		イギリスとフランスを何度も往復する生活を続ける	金星/ケートゥ	木星：獅子座 土星：獅子座

彼のために立てられた計画に従って素直に真面目に勉強しているものの、最後まで勉学に対する興味も情熱も感じることができませんでした。なかでも数学が苦手であったようです。さらにその年の秋に大学入学検定試験を受験しましたが、それも不合格に終って、結局、大学入学を断念しました。その後ロンドン大学に短期間聴講に通ったこともありますが、1920年には語学を磨くためにフランスに向かいました。そしてその年と翌年はイギリスとフランスを何度も往復する生活が続けられます。

1921年 春		自己流の瞑想を始める	太陽/月	木星：獅子座 土星：獅子座
1921年	12月3 日	母国を去ってから約10年ぶりにインドへ戻る。	太陽/火星	木星：乙女座 土星：乙女座
1922年	8月	弟のニトヤナンダの病気の療養のために、一緒にアメリカのカリフォルニア州にあるオーハイバレーに移る。この場所が以後のクリシュナムルティの「探求」の拠点となる。	太陽/ラーフ	木星：乙女座 土星：乙女座

オーハイバレーにきてからのクリシュナムルティは毎朝30分と就寝前の10分間、規則正しく瞑想を続けるようになりました。彼はある手紙の中で次のように書いています。

ところで私は8月3日から毎朝30分、定期的に瞑想しています。自分で驚いているのですが、私は割合簡単に精神を集中することができました。そして数日もしないうちに、私はどの点で失敗したのか、またどの点で誤ちを犯しているのかがはっきり分かり始めました。直に私は過去に積み重ねてきた邪悪な蓄積物を意識的に一掃し始めました。

この頃からクリシュナムルティは続けざまに不可思議な体験をするようになります。それは彼の一心不乱な「探求」から生じた一時的な幻想なのか、あるいは宗教的な体験の一部であるのか判然としません。そして、そのような体験の直前


には必ず熱に浮かされて半意識状態になるほどの肉体的な激痛を伴っています。このような苦痛のあとに、彼は仏陀の存在を感じたり、その姿を見たりしています。

私は自分自身から離れてしまいました。私はあらゆるものの中にいるのです。というよりもあらゆるものが私の中にあるのです。無生物も生物も、山や虫や呼吸しているすべてのものが私の中にあるのです・・・

私は光明を見ました・・・「真理」の泉が私に開示され、暗黒は消散しました。

こういう体験を重ねることによってクリシュナムルティは自分の使命感を強め、「真理」の探求に一段と拍車をかけていくのです。

1927年	6月30日	<p>神智学協会の総会で以下の演説をする。</p> <p>『真理はまるで夜盗のように、ほとんど予期もしていないときにやってくるものです・・・いかなる人間もあなたに自由を与えることはできません。あなたはあなた自身の中に自由を発見しなければならないのです。しかし私はそれを見出したので、その道を皆さんに示したいのです・・・その焔の中に入り、焔と一体となることは誰にでもできることなのです・・・そのときあなたは自由です。たいていの人たちは個人というもの、つまり「私」という意識にしがみついています。これこそ業を生みだすものなのです。』</p>	月/月	木星：魚座 土星：蠍座
1927年	8月2日	<p>神智学協会の総会で以下の演説をし、「星の教団」("The Order of the Star")を解散する。</p> <p>『私が今まで熱望してきたものを私は発見したのです。私になりました。従ってこれからは分離することは決してないでしょう。なぜなら私の思考や欲望や渴望 それらは皆個人の自我から生まれたものです はことごとく滅ぼされてしまったからなのです・・・</p> <p>しかしながら、「真理」はあなたの中にあります。あなた自身の心や、あなた自身の経験の中で「真理」を発見できるのです。そしてそれこそ唯一の価値のあるものです。』</p>	月/月	木星：魚座 土星：蠍座
1929年	8月3日	<p>「星の教団」の団員の前で以下のように語る。</p> <p>『「真理」は道のない陸地であると私は申しあげます。どのような通路によっても、またいかなる宗教や宗派によっても「真理」に近づくことはできません。それが私の考えです。私はそれを絶対に、そして無条件に信じます。「真理」は無限であり、無条件のものであり、またいかなる道によっても接近することができないため、それを組織化したり、強制したりするような組織を作るべきではありません・・・もしこのような目的で組織が生みだされるならば、それは障害になり、弱点になり、束縛になってしまふのです。それは必ず人間を損ない、成長を妨げ、その人間固有の独自性の確立を妨害することになるのです。その独自性というものは、あの絶対で無条件の「真理」をその人間が独力で見い出</p>	月/ラーフ 月/木星	木星：牡牛座 土星：射手座

		<p>すことの中にあるのです・・・</p> <p>ある特定の人だけがその幸福の王国に入る鍵を持っていると考えられています。しかし誰もその鍵を持っていないのです。その鍵を持つことができる権威のある人は一人もいません。その鍵はあなた自身の自己なのです。・・・私の唯一の関心は人々を絶対に無条件に自由にすることです。』</p>		
<p>1930年</p>		<p>神智学協会から脱退する。以後、あらゆる組織や制約から完全に解放され、半世紀にわたって、たった一人で活動を続ける。</p>	<p>月/木星</p>	<p>木星 : 双子座 土星 : 射手座</p>
<p>『自我の終焉 - 絶対自由への道 - 』J・クリシュナムルティ著、根木 宏・山口 圭三郎訳 篠崎書林 あとがきより引用抜粋、一部編集加工 (P. 433 ~ P. 441)</p>				

(資料)

引用文献：

『自我の終焉 - 絶対自由への道 - 』J・クリシュナムルティ著、根木 宏・山口 圭三郎訳 篠崎書林
あとがき (P. 433 ~ P. 441まで引用抜粋)

・・・(略)・・・

(2)

クリシュナムルティの生い立ち

ジドゥ・クリシュナムルティの生い立ちや経歴は、ごく最近までほとんど分からず、生年すら不明でした。しかし、1975年に最も信頼できる彼の伝記が現れて、その全貌がほぼ明らかになりました。著者はメアリ・ラッチャンズというイギリス人で、クリシュナムルティとは彼女の母親の代から家族ぐるみでの交際をしており、またクリシュナムルティの本の編集もしています。それは『クリシュナムルティ 覚醒への道』(Mary Lutyens, Krishnamurti: The Years of Awakening, John Murray, 1975.)という本で、以下この本に従って簡単にクリシュナムルティの経歴を紹介していきたいと思ひます。

ジドゥ・クリシュナムルティは1895年5月11日に、インド南東部のマドラス州の近くにあるマダナパルという町で、カースト制度の最高位の階級であるバラモンの家に生まれました。家系は名門に属し、曾祖父は有名な東インド会社の役職を務め、同時にサンスクリット学者としても名を知られていました。父親もマドラス大学を出て、インドの英国政府直轄の財務局に勤務し、後にはその土地の行政長官にもなっています。幼・少年時代のクリシュナムルティはおっとりしたおとなしい子供で、大人

Jiddu Krishnamurti ジッドウ・クリシュナムルティの目には鈍重という印象を与えていたようです。木や植物を長時間じっと見つめているような瞑想的な傾向があり、学校の勉強にはほとんど興味を示さず、毎日のように先生から鞭で叩かれていたということです。

たまたま父親が神智学協会 (Theosophical Society. 1875年にマダム・ブラバツキーがニューヨークに設立した神智論を中心とした宗派。1882年にその本部がインドに移された。)の会員であったことから、クリシュナムルティはその協会の二代目の会長であるアニー・ベサント(Annie Besant, 1847-1933. インド独立運動の指導者でもあった。)の目にとまったのです。ベサントは彼の宗教的天才を一目で見抜き、彼こそ次に来るべき世界の精神的指導者であることを確信したのです。というのは神智学協会の設立のそもそもの目的は、次に現れるであろう偉大な「世界の教師」("The World Teacher")のために、その準備をしておくことであったからです。そして、クリシュナムルティにその白羽の矢が立てられたわけなのです。アニー・ベサントが彼に初めて会ったのは、1909年11月のことで、彼がまだ14歳の時です。そしてそのわずか三ヶ月後の1910年3月に、ベサントは彼の父親の承諾を得て、以後の教育とその他の一切の面倒を見るために、クリシュナムルティを正式に養子として引き取っています。ここにクリシュナムルティの「世界の教師」としての路線が敷かれたわけです。

(3) ヨーロッパでの生活

クリシュナムルティはイギリスで正規の教育を受けるため、養子になってからわずか二週間後の3月22日に、ベサントと弟のニトヤンダと共にインドを発ち、5月5日にイギリスに着いています。このときはクリシュナムルティと弟の教育プログラムが立てられただけで、四ヶ月後に一度インドに戻っています。そして再び翌年の1912年2月にイギリスにわたって彼の教育が開始されましたが、その後、1921年の暮まで、約10年間ヨーロッパで生活することになるのです。当時クリシュナムルティは16歳でした。

教育といっても、とくに神智学協会の教義や特殊な訓練によって教育をするわけではなく、将来「世界の教師」になったときのための、いわば「紳士教育」なのです。インドではほとんど正常な教育を受けていなかったため、各学科の専門の先生が個人指導に当り、なかでも英語は神智学協会附属の大学の英語の先生について真剣に勉強しています。この時期に詩人のシェリーやキーツの詩が好きになり、自分で詩作もしています。このように学校教育ではなく、個人指導による教育であったため、交友関係もほとんど神智学協会の会員やその家族にかぎられていました。またちょうどその頃に神智学協会の中に「星の教団」("The Order of the Star")が設立され、クリシュナムルティがその団長に任命されています。

こうして基礎的な勉強が済んで、こんどは1915年 1916年にかけてオックスフォード大学の第一次試験のための準備が進められます。そして翌年1917年に受験して不合格となり、さらにもう一年勉強して1918年に再度挑戦しましたが、これも失敗に終わりました。彼のために立てられた計画に従って素直に真面目に勉強しているものの、最後まで勉学に対する興味も情熱も感じることができませんでした。なかでも数学が苦手であったようです。さらにその年の秋に大学入学検定試験を受験しましたが、それも不合格に終って、結局、大学入学を断念しました。その後ロンドン大学に短期間聴講に通ったこともありますが、1920年には語学を磨くためにフランスに向かいました。そしてその年と翌年はイギリスとフランスを何度となく往復する生活が続けられます。

(4) 海図のない航海

クリシュナムルティに定められた「真理」の探求は、大学の受験勉強のために一時中断されていましたが、彼がフランスにわたった頃から再開されます。「真理」の探求とは言っても、そのための方法があるわけではなく、特定の宗教の教義や戒律を遵奉したり、師の教えに従って修行を積んでそれに近づけるわけでもありません。神智学協会はクリシュナムルティを来るべき世界の精神的指導者として選んだだけで、彼がその目的を実現するまで細心の注意を払って、彼の生活や生活環境を保障してやるだけなのです。クリシュナムルティは究極の「真理」を発見するまで一人で進んでいかなければならないのです。いわば海図のない航海をするようなものです。

フランスに移ってから彼は絶えず仏陀のことを考えるようになります。そして次の仏陀の言葉が彼に強い衝撃を与えました。

私はすべてを征服し、すべてを知った。私は欲望の破壊力から離れて、汚れなく、拘束されず、完全に自由になった。

この仏陀の言葉によって、彼が将来果たすかもしれない彼の使命に対する関心が、急にクリシュナムルティの心に目覚めてきます。またこの時期にドストエフスキーの『白痴』や、ニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』を読んで感銘を受けています。

そして1921年の春頃から自己流の瞑想を始めたことが彼の次の手紙で知ることができます。

私は私の自我を抑えなければなりません。そして一生懸命にやらなければなりません。私は今そうしています。私は私自身を抑制しました。私はいろいろなことをやってみるつもりです。今一種の瞑想のようなことをしています。しかしそれをもっときびしく、規則的にやらなければなりません。それが唯一の方法です・・・私は私自身を発見しなければなりません。

それができたとき初めて、私は他の人たちを助けることができるでしょう。

クリシュナムルティはこの年の12月3日、母国を去ってから約10年ぶりにインドへ戻りました。そして、翌年の1922年8月、弟のニトヤナダの病気の療養のために、一緒にアメリカのカリフォルニア州にあるオーハイバレーに移りました。この場所がこれからクリシュナムルティの「探求」の拠点になるのです。

(5) 「真理」の発見

オーハイバレーにきてからのクリシュナムルティは毎朝30分と就寝前の10分間、規則正しく瞑想を続けるようになりました。彼はある手紙の中で次のように書いています。

ところで私は8月3日から毎朝30分、規則的に瞑想しています。自分で驚いているのですが、私は割合簡単に精神を集中することができました。そして数日もしないうちに、私はどの点で失敗したのか、またどの点で誤ちを犯しているのかがはっきり分かり始めました。直に私は過去に積み重ねてきた邪悪な蓄積物を意識的に一掃し始めました。

この頃からクリシュナムルティは続けざまに不可思議な体験をするようになります。それは彼の一心不乱な「探求」から生じた一時的な幻想なのか、あるいは宗教的な体験の一部であるのか判然としません。そして、そのような体験の直前には必ず熱に浮かされて半意識状態になるほどの肉体的な激痛を伴

Jiddu Krishnamurti ジッドウ・クリシュナムルティ
っています。このような苦痛のあとに、彼は仏陀の存在を感じたり、その姿を見たりしています。

私は自分自身から離れてしまいました。私はあらゆるものの中にいるのです。というよりもあらゆるものが私の中にあるのです。無生物も生物も、山や虫や呼吸しているすべてのものが私の中にあるのです・・・

私は光明を見ました・・・「真理」の泉が私に開示され、暗黒は消散しました。

こういう体験を重ねることによってクリシュナムルティは自分の使命感を強め、「真理」の探求に一段と拍車をかけていくのです。

クリシュナムルティが長年にわたって探求していた「真理」、あるいは「真の実在」を実際に発見したのは1927年ではないかと思われます。31歳の終り頃か、32歳になった頃と思われます。というのは1927年6月30日に、神智学協会の総会の演説の中で彼は次のように言っているからです。

真理はまるで夜盗のように、ほとんど予告もしていないときにやってくるものです・・・いかなる人間もあなたに自由を与えることはできません。あなたはあなた自身の中に自由を発見しなければならないのです。しかし私はそれを見い出したので、その道を皆さんに示したいのです・・・その焰の中に入り、焰と一体となることは誰にでもできることなのです・・・そのときあなたは自由です。たいていの人たちは個人というもの、つまり「私」という意識にしがみついています。これこそ業を生みだすものなのです。

それから1か月後の8月2日の演説では次のように言っています。

私が今まで熱望してきたものを私は発見したのです。私は一つになりました。従ってこれからは分離することは決してないでしょう。なぜなら私の思考や欲望や渴望　それらは皆個人の自我から生まれたものです　はことごとく滅ぼされてしまったからなのです・・・

しかしながら、「真理」はあなたの中にあります。あなた自身の心や、あなた自身の経験の中で「真理」を発見できるのです。そしてそれこそ唯一の価値のあるものです。

(6) 新しい出発

自我や「私」というものが実体ではなく、実は思考によって虚構されたものであり、それらは思考の一部にほかならないということ洞察することによって、クリシュナムルティは全く新しい絶対の「真理」を発見しました。この「真理」は自己の外部にあるものではなく、またいかなる方法や追求によって得られるものでもありません。「真理」は私たちの内部にあるものであり、私たちが自分自身の中で動いている思考の全構造を理解して、自我や「私」を完全に終焉させたとき、この「真理」が私たちの中に顕現されると彼は言います。従って「真理」の発見のために特定の宗教や宗派に所属する必要もなく、どのような修行も訓練も努力もいらないわけなのです。

自分を知るために他の人が手を貸す余地は全くないからです。こうしてクリシュナムルティは彼が主宰していた「星の教団」を解散し、神智学協会からも脱退していくのは必然の成り行きです。

そして1929年8月3日、彼は「星の教団」の団員の前で次のように言っています。

「真理」は道のない陸地であると私は申しあげます。どのような通路によっても、またいかなる宗教や宗派によっても「真理」に近づくことはできません。それが私の考えです。私はそれを絶対に、そして無条件に信じます。「真理」は無限であり、無条件のものであり、またいかなる道によっても接近す

Jiddu Krishnamurti ジッドウ・クリシュナムルティ
 することができないため、それを組織化したり、強制したりするような組織を作るべきではありません・・・もしこのような目的で組織が生みだされるならば、それは障害になり、弱点になり、束縛になってしまうのです。それは必ず人間を損ない、成長を妨げ、その人間固有の独自性の確立を妨害することになるのです。その独自性というものは、あの絶対で無条件の「真理」をその人間が独力で見出すことの中にあるのです・・・

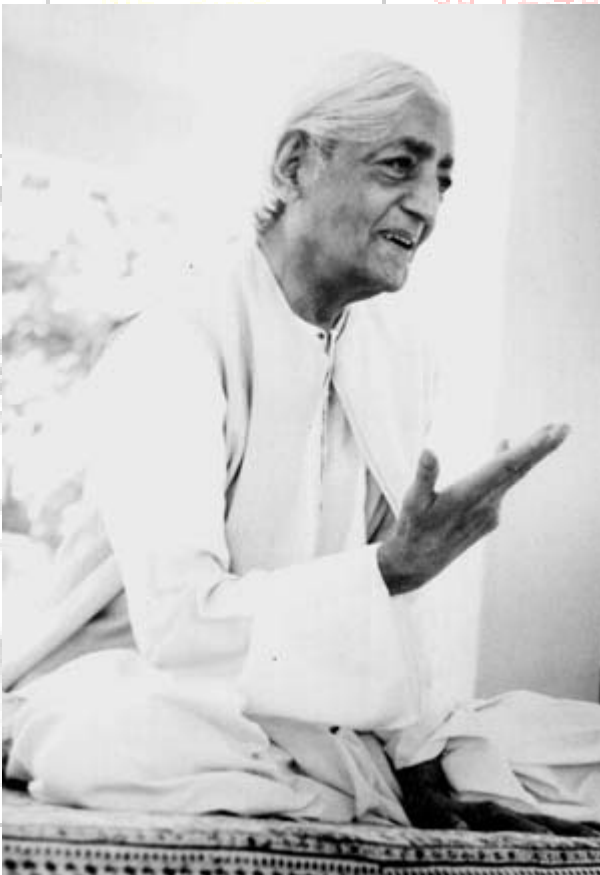
ある特定の人だけがその幸福の王国に入る鍵を持っていると考えられています。しかし誰もその鍵を持っていないのです。その鍵を持つことができる権威のある人は一人もいません。

その鍵はあなた自身の自己なのです。

そしてこの演説の締めくくりとして彼は次のように言っています。

私の唯一の関心は人々を絶対に無条件に自由にすることです。

さらに1930年に彼は神智学協会からも脱退しました。こうしてクリシュナムルティはあらゆる組織や制約から完全に解放され、以後現在にいたるまで半世紀にわたって、たった一人で活動を続けているのです。



SaR 10:16

Su	28:25	Ar
Mo	02:45	Sg
Ma	19:25	Ge
Me	06:29	Ta
Ju	12:48	Ge
Ve	08:05	Ge
SaR	10:16	Li
Ra	27:28	Aq
Ke	27:28	Le

Vi
K
Ve
S
M
M
R
J
S
M

Ma	Mo
Me	
Ju SaR	
Su Ke	Ve